

濱一衛著 「曲阜徐州開封洛陽西安旅行記メモ帳」

中里見, 敬
九州大学言語文化研究院 : 学術研究者

稲森, 雅子
九州大学人文科学研究院 : 専門研究員

<https://doi.org/10.15017/4736689>

出版情報 : 言語文化論究. 47, pp.122-107, 2021-10-31. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



濱一衛著

「曲阜徐州開封洛陽西安旅行記メモ帳」

中里見 敬ⁱ

稲森雅子ⁱⁱ

〔解題〕

本稿は、九州大学附属図書館濱文庫に所蔵される濱一衛先生自筆の「曲阜徐州開封洛陽西安旅行記メモ帳」(浜文庫／日文戯曲／21)¹を翻字したものである。濱文庫には別に手稿「曲阜徐州開封洛陽西安旅行記」(浜文庫／日文戯曲／21)²も所蔵されており、『言語文化論究』第二十五号(二〇一〇年)に翻字を発表した³。

「メモ帳」は縦15・6cm、横10cmの小さな携行用リング式ノートで、一九三六年二月二十九日に北平を出発した濱先生が旅行の途上で書き記したものである。文字の乱れた部分は揺れる列車内で記したと思われる。この旅行は、天津から曲阜、徐州、開封、洛陽、西安を巡って北平に戻ったと思われるが、「メモ帳」は三月七日西安の部分で杜絶している。一方、「旅行記」は四百字詰め原稿用紙に清書されており、二つ折りで製本された現状のサイズは縦20・7cm、横15・4cmである。「旅行記」は北平に戻ってから、あるいは一九三六年六月の日本帰国後に、「メモ帳」をもとに執筆されたと推定される。「旅行記」の文章は整理、推敲されているものの、その内容は「メモ帳」と一致する。ところが、「旅行記」が西安到着で中絶しているのに対して、「メモ帳」には西安の易俗社で観劇した記録が残されていることに、最近気付いた。「メモ帳」の記述と松浦恆雄先生の研究により、濱先生が西安で見た演目とそ

の状況が特定され、また濱文庫に所蔵される西安の戲票(チケツト)の由来が明らかになった⁴。このように「メモ帳」には独自の史料価値が認められるため、「旅行記」とあわせて翻字して公表するものである。観劇の記録や車窓から見た村芝居の様子は2、3、6、9、10、15、55、62、64ページに見える。

注

- i 九州大学言語文化研究院教授
- ii 九州大学人文科学研究院専門研究員
- 1 <http://hdl.handle.net/2324/4369967>で公開。
- 2 <http://hdl.handle.net/2324/4369968>で公開。
- 3 <http://hdl.handle.net/2324/18370>で公開。
- 4 松浦恆雄「濱文庫の至宝・43枚の入場券と領収書」(中里見敬・松浦恆雄編『濱文庫戲単図録・中国芝居番付コレクション』福岡・花書院、二〇二一)二六一〜二六二頁参照。

〔凡例〕

- 一、原則として原稿の表記を尊重したが、旧漢字は常用漢字に改めた。漢字の送りがなについては、原稿のままとした。
- 二、句読点はおおむね原稿に従ったが、読みやすさを考慮して、句読点を追加したり、読点を句点に改めた箇所もある。
- 三、判読できない文字は■とし、推測による翻字は「」を付す。脱字を補った箇所には「」を付す。翻字者による注記は()を付した。
- 四、メモ帳の欄外に記されている列車の駅発着時刻は、【欄外】の注記を付して、文中に挿入した。
- 五、注1前掲の九州大学学術情報リポジトリで公開されている「メモ帳」の画像と対照する便宜を考慮して、ページごとに区切りを入れた。

【1ページ】

二月二十九日

七時前起床。直ちに、毛布、齒磨粉等の用意をして、飯庁に赴く。特におばさんの用意の四つ卵のお汁を頂き、七時半頃、喰べ終り、着物を換へたり、用意を終り、玉山に東站到り電話を掛けさせ問ひ合はすに、八時十分、九時四十五分といふ。其尋いで洋車で東站到り赴く。未だ彼等同行来らずと暫らく待ち、試みに改札口に至れば、九時三十分とあり、驚いて走り、息も詰ららばかりにて間に合ふ。三等である。同行の海軍の、安村田島両氏は一等に居る。十一時五十分天津老車站に至る。直ちに洋車を僱ひ総領事館に至らんとするに、洋車夫誤りて国都公館に至る。やつと総領事館を見出し、西田副領事に会ひ、執照を受取る。扱ひの甚だ丁寧なるに一驚を

【2ページ】

す。此れも奥村領事の御尽力の賜物と感謝す。領事館の近所の土産物店にて奴壽司の所在を知り行くに、場所無しと断はらる。止む無く、田舎屋なる変な店で、昼食を採る。私は親子丼(三十五錢)、N君はニギリ(五十錢)を食ふ。其味甚だ悪く只だ驚くばかり。其の田舎屋のお内儀に聞き、電車通りの櫻村洋行に写真機の修繕を頼む。距離の誤差は直るが、レンズの輪は直らぬといふ。五時頃出来る約束で其処を出で、森永のキングデーでココアを飲み、暫時休息の上、中原の游芸場に行く。三層は落子館、四層は評戯、五層の大劇場は二簧戲、共通で二毛の入場料。五層は特に二十錢の追加、落子館で落ちついて聴く事にした。梅花調、平韻大鼓、皮黄西皮、戲情墜子等を聴く。北京との差異は、叫声が盛んな事と、子供(十四五才)

【3ページ】

が特に多く、叫声を為してゐた。又演者の方も北平の様にピントしてゐないで、ニヤツと笑つたり、一寸愛嬌を見せる。五時頃ま

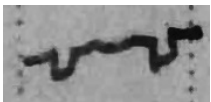
で見たが、よいのは無かつた。が、顔は何れも美しかつた。コツプを買ひ、鐘紡で兔毛の靴下二足(三元)を買ひ、櫻村により、奴壽司に又行く。此度は場所もあり、握りと板前を喰ふ。計一円五毛五分。五時半頃になつたので、洋車で老站到り飛ばす。其の途中の寒い事、後で聞いたのだが零下十五度といふ。駅で色々の入れちがひで、心配の末、予定通り六時二十分の上海特急に乗る。二等寝台である(二十元余)。車は大層立派で、恐らくは日本の車より立派であらう。便所も奇麗し、毛布、敷布の類も美しい。自分は落ちるかも知れないと思ひ、下段にねる。午前六時半頃起き、用意する。朝の窓より眺めた感じは、満鉄の其時を思ひ出す。遠くかすんだ山々、

【4ページ】

独特の丁度朝鮮沖より見た朝鮮の様な感じである。而も夫は饅頭形の、火山の、甲山(注・神戸の六甲山)の様な感じである。何といふ駅か忘れたが、駅前にあつた牛、山東牛であるが、その黄色い細面の顔は何ともいへない気持ちのよい、のんびりしたもので、青島肉を喰ふ時は、之から何時もあの顔が思ひ浮ぶ事であらう。曲阜の駅前の迎賓館^{ヨウヒンカン}?を、車窓より眺めたりして、兗州には朝七時五十分着く。のこのこ車屋や、旅館の客引きを追ひ乍ら、とうとう豊泰楼で、鶏絲湯面を喰ふ。極めてまづい。二十錢。其の飯館のランプには目を引かる。衆議の一決をへて、鐵路賓館に止る事にする。七号の部屋、一晚二元四毛、三ツの床を入れる事にする。公共汽車は午前八時に出て、午後三時頃に帰るので、駄目。城内外共に自動車屋は無いといふので仕方無く、洋車で行く事にする。来回一円五十仙。九時前に出掛け、

【5ページ】

十一時前に曲阜に着く。其の途中の河にある橋の様なのに感心した。水の無い時は全くなく、有る時は大水の支那の河には、此の式のが最も適当であらう。



の様に途中二箇所、凹んでゐる。大理石の様な石である。兗州より曲阜への道は五間巾位の坦々たる大道で、陸軍二十師が修覆したといふ。駅より遠からぬ所に、二十師兵營あり。其道は二里毎に道路標あり。三個の行亭と、三個位の看馬路の詰所があつた。途中公共汽車（新車の自動車）に会つたが、共用用といふ。土牛車、手車、自転車、洋車等を見る。建設新曲阜の標語のアーチある門を抜けると、両側には、蒼然たる古色を帯びた家々が並んでゐる。何れも小商売屋の様であつた。城門に入る時に、巡査が一寸洋車夫に訊く丈で何もなかつた。□徳門より入り、遊記通りの各碑を見学する。大成殿の大理石柱に驚いた外は、何の

【6ページ】

感慨もない。又其の八角柱と、彫物も面白い。一番子供騙しの様なのは魯壁であらう。其時まで十二〔時〕すぎであつたので、三時半をキヤツチする可く車を急がせ、墓に参り、帰途につく。無事、二等車の人となり、三時三十一分出、直ちに昼食をとる。曠牛肉、湯、パン、紅茶で喰ふ。一円二十銭。徐州までの汽車賃は五円二十銭位。七時五十分徐州着。途中、滕州過ぎた所辺に野芝居があつた。黒山の様な人であつた。前に云つた朝鮮式の山々が見えたので、兵士と共にキヤメラに入れた。兵卒が二等車に〔用意して居る等、甚だ不謹慎である。滕鄒等の、懐しい名物を聞き乍ら、嘗ての惨案のあつた臨城についた。相当大きな駅である。駅で物売りの姿等二枚撮る。臨城を過ぎ、七八分経つてから、湖水の大きいがあるので不思議に思ひ地図を見るに無い。ボーイに聞けば、甚么湖といふ。

【7ページ】

黄河氾濫の事をいはない。大体微山湖の氾濫したものらしい。何といつても支那は広い、大きい。一望々、大海の様子、中に大きな木が、いたしい姿を表はしてゐる。其下に大くの財産の類や人家、生命が失はれた事であらう。其の損害の莫大な事、想像の外

にある。所々鉄道沿線二三百米の所辺まで、水が来てゐる。韓荘を過ぎた所に、運河があつた。中約六七間。徐州に着く前に、巡査の様な私服に何処から来、何処へ行くかを聞く。私服が横へ坐つた。名刺を呉れといふ。四人の名刺を差し出す。そう云つてゐる中に、一動揺があつたと思ふと、もう着いたといふ。驚いて下車の用意をすると、三十分止まるから、周章てるなといふ。下車後、よく肥えた巡査——正服——が来、又同様の事を聞く。站より出れば、下車する人々の荷物を調べてゐる憲兵の様〔な〕軍服姿を見る。町全体が軍人

【8ページ】

の様に軍人が多い。赤ら顔の巡査は又他の二人の年青年の巡査に交（注…わたすの意）した。巡査の云ふ言葉が聞き難かつたが、中国旅行社がよいといふ。同行の巡査二人と行けば、既に室が無いといふ。引き返して大金台旅館に行く。玄閣正面に「大金台」と三大字の金字で書て（黒漆塗地）あり、後で聞いたのだが、一等旅館だといふ。二階の十六号南に居着く。一部屋代が一円四十銭、床を一つ増が二十銭、火爐子が四十銭、計二人で二元（フットン代として二十銭とる）といふ事になる。だから一人一円だ。思へば安い。優等の部屋だ、と室内に印があつた。時間も相遅く、空腹を覚えたので、保護の二人の巡査と共に横町の華北飯莊に行く。二階の一間に通れば、又どの部屋も軍人である。徐州は元来軍事上要点で、孫伝芳軍の戦争の時も此処を中心と争つたといふ。其昔張勳が威張つたと木下先生

【9ページ】

の旅行記（注…木下李太郎「徐州—洛陽」、『地下一尺集』東京…叢文閣、一九二二、一四三頁。いま『木下李太郎全集』第十巻、東京…岩波書店、一九八一所収、一一一頁）にあるが、其んな感じのしない、素樸な田舎の商市の様な感じである。菜單を持つて来させて見たが、判然としないので、四冷菜、六熱菜で二元とい

ふのを採る。四人で一斤の酒を飲み、愉快になる。食後聴戯に行かんとするも、夜の外出は、と、巡査が煩さいからだと思ふが、行かない様に勧めらる。宿へ帰れば既に十時、他の御両人女を呼ぶ相談をしてゐる。呼ぶ事になったのであるが、結局呼ばない事になった様である。中丸君と同室になり、十二時頃、手紙なぞ書いて休む。明くれば

三月二日

午前、昨日と同じ華北飯荘にて食事をす。面、稀飯の類を喰ふ。小生とN君は城内の芝居小屋を観る事にし、巡査の護衛を一人で城内に出掛ける。一つ益智といふ電影と芝居とを

【10ページ】

並演してゐる、大通りの一寸横へ曲つた所にあり、小さい劇場、平屋建の様に見受けた。中へは入れないので、外から見てゐると、大勢の野次馬がよつて来たので（以下9行空白）

【11ページ】（12行すべて空白）

【12ページ】

【欄外】徐州 三、四一 銅山県 黄口 李荘 ■■ 教会

碭山 三、一五 楊集 三、三五（通過） 劉提圈（通過） 四

時 馬牧集 四時半 二十分着 ■■ 四時二十六分 商邱

五時十三分 五着 ■■ 五時十五分 柳河 六時十分頃 民

権集 六時三十八分着 茶陰 十三、四二

三月二日。起床後、一同昨夜の華北飯荘に寄り、朝食として（以下1行空白）

銅山県、装甲車あり。立派なもので、共産地区へ運んで行くのであらう。黄口まで相当な時間を要した。南側遙かに黄河の流れが光つてゐる。黄口の駅は全くの田舎駅ではあるが、李荘の駅よりは立派である。駅の南側の窪地に、アンペラ小屋あり。A氏は避難民だといふ。そうかも知れない。沿線の風景は別にとり立てて云ふ事も無いが、山東で見たのと違ふ事は峨々たる山が看あたら

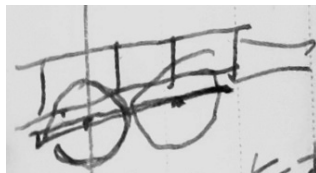
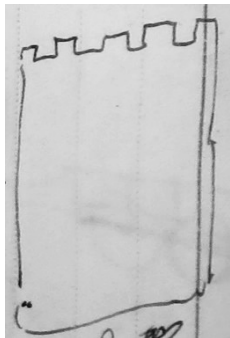
ない事であらう。畑の畔には麦の小さい芽が出て点々と薄緑になつてゐるのや、ポプラの細長い枝、楊柳の芽が出て、紅緑になつてゐるのも同一である。沿線両側は大概ひらけ、畑になつてゐて、遠くに森林が見えてゐる。そしてその森林と

【13ページ】

鉄路の間の畑の中にあちこちに大木が点在してゐる。それ等の木は、大きな力を持つた閑番の様な感がある。李荘を過ぎた時分、北側一千米位の所に教会式の建物があつた。何であらうか。修道院といふ風のものかも知れない。各所に散在する墓は勝手に点在してゐるといふ点は違ふが、其の形や感じは日本と同じだ。汽車の音に驚いて逃げ走る騾馬の子や、逆も細面の子牛が広い畑の中を縦横に走り廻つてゐるのは眼なれない景色とて大に眼を引いた。街道を横切る、形【図】の車の通り行くのも面白い。其上に舞台に出て来る様な婆さんが悠然と坐つてゐるのも画になつてゐる。沿線の百姓部落を通ると、よく家の中心に当る所に

【14ページ】

【図】型の煉瓦造りの家の様なもの、高さ二階位のあるのは、何用に供するものか。三時頃、碭山に着く。駅にゐる兵士の帽子は、今までと異り、鉄兜を頂いてゐる。剣も着けてゐる。が別に物々しい感じもしない。唯一人しかゐない精だらう。駅にゐる物売りの梨は素晴らしい。一斤三毛五といふ。二個しかあるまい。大ききさの程度を想像するがよい。釜に水を入れて、三時十五分に出た。前から気付いてゐたのだが、此辺の家の屋根は「大」家は別



として皆、藁と土と交ぜた様な感じのもので葺いてゐる。余り丈夫ではあるまい。駅の近所は人家が多いから、多少感じが違ふが、離れると、相変らず何の感じも起させない。平坦な単調なもので、一寸した影一筆でも無ければ印象には残らないが、碭山から少し離れると、多少

【15ページ】

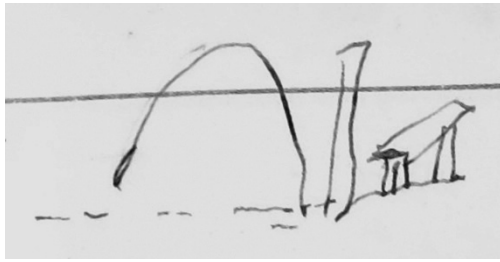


変つて来たのは両方の畑が広くなつて来た事だ。遠くの山に所々見ゆる【図】の様な型の塔、一物も留めない大野原の中に物拾ひ通る人物、矢張り画の世界である。碭山を出て約

五分、両側の畑は著しく広くなり、楊集の手前辺りが最も著しい。沿線の北側より南の方が、概して平坦でない。一面の畑のあちこちに羊の群が草を獲つてゐる。今迄照つてゐなかつた太陽が其の半面を照らしてゐるのも面白い。四時頃、劉提園を通過。駅の南側に土城あり。本式の通り出来てゐる。其中には縁日の様な賑ひであつた。野外劇場の様なものも眼についた。又同じ様な景色が続いて行く。何うしたものか劉提園を過ぎて、忽んど人畜を見掛せず、ただ両側に広がる畑を見るのみとなつた。馬牧集

【16ページ】

駅の南方に本城らしきものあり(約一千五百米)。駅そのものは何の特長もない。非常に服装の立派でない非武装の兵隊が五六十人居た。商邱についたのは五時頃。駅には、廿六路廿七師の印のついた兵が一個列車ゐた。貨車の中に一碗の菜で老若の兵が饅頭を



15ページ上部に描かれた図

たべてゐた。アハレを留むるは、極く新式の自動車載せある貨車に、野天の様に蒲団を敷いて寝てゐる。徐州へ行くといふ。恐らく共産軍付残兵の交代でもあらう。駅の北側に町がある様で甚だ殷盛である。前の三等車より降りける憲兵を迎へに数人の——(注：某々の意味か)が来てゐたのは「未安然」一点である。汽車は三十分も止つて、五時すぎ更に西へと走つて行つた。柳河駅では又兵士の一行の徐州へ行くのを見た。それからは、夜が深くなつて来て窓外に注意しな

【17ページ】

かつたから小駅発着の時刻に注意しなかつたが、大体九時頃開封についた。汽車の中で貳回喰つたが、食堂車から運ばせた。最初は炒飯と牛尾湯、鮑魚湯(清湯ではない)を取つた。夜は其等の湯と、炒面を採る。夜の九時前後、開封に着く。巡警が来てないので、或ひは不便かとも思つたが、出口に憲兵が旅客の荷物を取調べてゐるので、我々は執照を提出し、公安局の巡警の世話で河南旅社に着いた。大通りの実に立派な宿で、私に懐具合を心配した。二階の上等の部屋に通され、公安局に電話せられて、三四人の巡警が来、執照に印を押し、外人入境云々の書き物を造つた。彼等が帰つてから、十時二十分頃であつたが、四人で新華楼といふ風呂屋に行く。立派な部屋で風呂に入り、流しを呼ぶ(六分)。勿論

【18ページ】

隣室には二人の巡査が待つてゐる。書き忘れたが、駅より中心の地勢へ行く間に、中正門といふ洋式の大きな門があり、数人の巡警が番してゐたが、巡警の一声で何んの事も無く通り越した。流しは私は初めてであつたが、甚だ面白いと思つた。先づ石鹸を使ふか否を聞き、肩から胸、背、足と洗ひ、後に板を洗つて寝かして洗ふ(六分)。揚つて、アメを喰べたりして、十一時半頃宿へ帰る。ストーブの調子も前の所より甚だ良く、相当疲れてゐるので、

恐らくよく眠れる事であらう。

三月三日

午前八時頃起床。曇り模様。九時頃より他の四人も起きて来、相談の末、十時半頃より自動車を用意、市内見物に出掛ける。自分等は朝食として冰糖蓮子湯と蓮子希飯を喰ふ。

【19ページ】

他の二人は鶏絲湯面を喰はる。自動車は一度曲つて真直に龍亭へ行く。先づ坊を見る。両側にペンキを塗り、緑と紅に無残にも形を悪く感ぜしむる。獅子ある。北宋の遺物といふ。車は直先ぐに龍亭に達する。堤の様になつて、両傍に池がある。此の辺一帯、宋の故宮の遺といふ。両側の池は東は潘湖、西は楊湖である。一番上のは礼堂とあり、其内に昔玉皇の像ありたりといふも、今は只蟠龍の石墩を余すのみ。傳へていふ宋藝祖の宝座と。礼堂下の名階は八十級、中飾りは六十四級、中間に蟠龍の彫刻あり。今は公園の如くなり、夏日游覧の客多しといふ。【今日何故?】

自動車にて走る事十余分、河南大学医学院附属医院の牌楼の下を抜けて、少時、鉄塔に至る。鉄^{てつ}、琉璃を以て磚成

【20ページ】

され、仏像、羅漢、禽獸(主として獅子と龍)を模し、八稜、十三級、高く雲霄に出てゐる。屢々修理されたりといふも、最も修理のまづいのは最近のものらしく、セメントにて獅子の形に造れるもの等、殊の外、不快に感ぜられる。全体非常に細身にて形もよく、殊に色々の配合甚だ面白い。黄、褐、緑等の色にて、織り出されたるは宛然古錦を見る如く、落着いた、どつしりした感じを与へて呉れる。折から寒風の下に物売りの老婆子供等と、傍に留まる細身の塔身とはそぞろに寂しさを呼び起す。塔前にて記念撮影等し、自動車を走らせて博物館に至る。約十七八〔分〕見当。極く小形の博物館。元何に使つた建物か明かでないが、何かの廟の後がちがひない。入場無料の所は、土地の産物たる石、玉、織

物等、袁世凱の

【21ページ】

遺品たる清朝の官服、民国後の洋服の礼服等を陳列し、甚だ興味無し。更に進めば、明器の類あり。其数豊富にして、何時頃のものと、又真偽の程も明かならざれ共、長さ三四尺位の乗馬姿の武人の馬と人との調和等、面白く見た。勿論馬が多いが、種々のものがあつた。土器の武人の中に、細長い物、太短い物(丁度万曆版画の「美」の如き)等々。更に進めば、二百文の入場料を取る所あり。四人で十錢を払ふ。甲骨の場所、土器の錢をはぢめ、種々の素焼の土のものがあり、其次に、甲骨の類があつた。拓にしてあるもの等はどういふ訳か知らぬが美しい艶があり、文字の刻の具合が甚だ鮮明である。余程鋭い物で刻んだのであらう。其他の骨類があり、亀甲の何の文字の無い物、即ち實際トビに

【22ページ】

使用するものは腹で、背部は不用のものなるにより、棄てたものであるといふ風に、説明書があつた。又亀の殻もあつた。又昔の獸類が如何に大であるかを示す証左として、肋骨、肩胛骨の大きいもの、牙顎等があつた。又貝類が錢に使つたといふ風の説明があつて、種々の貝類があつた。次は此地に有名な新鄭の出土で、其昔鄭伯の墳墓といふ、新鄭古物のある吉金の部屋である。一番驚いたのは、形のよさは勿論であるが、其形の全体に大形の事で、相当「毒物」が出てゐた。最後の二列の陳列棚は、洛陽出土の物である。其室を出れば碑物の室で、二棟ばかりに分れてゐた様で、最初の部屋には三体石経があつた様であつたが、拓本をとつてゐて見られなかつた。碑拓を売つてゐる部屋もあつたが、値段の高いのに驚いた。又石経のあつた場所の辺に、現在の棺と同型の

【23ページ】

石で出来た棺が、特別の部屋に置いてあつた。出口の所に1623年の和蘭製の銅(真鍮)の大砲が二つあつた。外国の文化の早

いのに驚いた。

其処より約二十分、古吹台の門あり。階段を上り、上に行けば、農「軍機」局いふ風の官庁になつてゐて、公開はしてない。(以下6行空白)

【24〜29ページ】(12行すべて空白)

【29ページ(ページ数重複)】

【欄外】開封十四、二〇 韓荘鎮着十四、四七 癸十四、五〇
中牟県十五、〇八 一〇 白沙十五、三〇 三七 古城十五、
五七 五八 鄭州 鉄爐十六、四八分 滎陽十七、一二分 汜
水十七、三六 鞏県 孝義十八、四五

(徐州―開封)

汽車が開封を出る頃には当りの景色は全然変つてゐた。一面落莫たる感じがし、当りは全く砂漠同然である。冬の名残の細い樹が而もまばらに生え、水溜りのあるのも、曇つた空の色合ひと共に心に沁みる寂しさがある。開車後十五分も経たざるに既に砂漠の様な感じで、線路に向つて、痩せ細つた驢馬が満身の荷物を負ひ、全衣裳を被つたかと思はれる程太々と着物着た馬子に引かれてゐる。樹々の少ないといふ点は南側は北側よりひどい様である。二十四五分経つと、一面畑になつてゐる。丁度其頃南側の赤土広野に小さい豚が人も付いてゐずに草を喰つてゐる。異景は其の傍に一群の鳥が何かを啄んでゐる。「其」豚の方も何の害を加へ様ともしてゐない。韓荘の駅では駅の垣根に人が眼差しに並び、木の根には煙草を吹かして汽車を眺めてゐる。駅の附近の家は赤土で全部が出来てゐる様で、前方にキビの

【30ページ】

様なもので囲つてゐる。其所に一寸うい女の子が安い布の褲子を着て、母親らしきに連れられて立つてゐる。沿線の北側は道もない様な所に足跡や車の跡があり、此辺特有の前輪の小さい一輪車珍らし。一枚の板で丸くした物の様である。一人の白鬚の老翁が

八手の大きい様なものを悠然と引いて歩いてゐる。恐らく枯藁を集めてゐるのであらう。其んな景色をあち此処で眺める。水溜りになつてゐる所を埋める為であらう、盛に十人位の土方が土を運んでゐる。

三時五分頃になると、両側には一面広々とした麦畑に点々と黒い影の百姓の姿を認めた。村落には瓦作りの此辺には立派な祠が見ゆる。何の用に供するのか、あちこちに可成り離れた距離に、円形の墓を低くした様な物がある。隣の人に聞けば、肥料を積んであるといふ。

【31ページ】

恐らく土を堆積したものであらう。此辺にも一昨日汽車の中で見た種籾の四輪車がある。二頭の牛が、引いてゐる。

滎陽を過ぐる頃より、地形にやや変化あり。汽車は暫く掘抜きの間を通る。而も南方遙かに一連の山脈を見る。其中右手に見える山の上には城堡の如き環状形の如きものが見ゆ。そも何山か、又北方にも又二連の低き山々あり。北側に色も新しき石造の樓門如きものあり。三門にて門の戸は黒塗り、四方に柏樹の廻しあれば恐らく、墳墓ならんも、鉄路に正対する如き、もう一寸しなんとかならないものか。

滎陽を過ぎて十数分、地勢高く、一帯黄土の山の如し。或ひは窟居の家もあるまいかと思ふ中、北側に一帯の窟居地帯あり。門の如き全く普通の門の如、両開扉にて黒塗り、対子等を張りたり。

【32ページ】

又、院子等を持つものあり。車窓より、1/300にて撮るも結果は知れず。其次の駅につくを見れば、即ち汜水なり。駅は南側の上を切り取りたる様な所にあり。折柄窓の下に人声あり。何かと見れば、十二三人男子あり。頻りに可憐を叫ぶのであらう。窓越しなれば聴き取り難し。根気よく既に十分、未だそれを止めず。仏心を起し恵まんとすれど、既に発車す。止むを得ず、デツキに出

でて投ず。汜水を過ぐれば、風景は全く異り、特に北方に窟居家屋多く、未だ見ざる光景の事とて、暫し嘔然と眺む。既にして両方共に幅々たる黄土の崖にして、皆真直に屹立す。又極く短きトンネルあり。とにかく、一帯の両側悉く人家にして、A氏云ふ。飛行機より此の地勢を見れば、一帯畑あれども、人家なしと報告する人あるやも知れずと。さもあらん。トンネルを出づれば禁止

【33ページ】

行人通行山洞の立札あり。山峽の広くる所に至れば、遙か北側に黄河を望む。地を利用する事極端にして、鉄路の両側なる二三尺分の所にも麦等植えあり。平地より暖き精か、青々とよく成長してゐる。「長約」十の一分「頃」に至れば、土地の下り坂になりたる精か、全速力にて走る。

遠く煌々たる電光見ゆれば何かと思ふ中、即ち西安発の快車が鞏駅に止つてゐるのが見えた。石炭を袋に入れたものをドンゴロスに入れたのは二組が、驢馬に積んで沢山駅に集めてゐる。此処に市の要「大」の兵器廠があるといふ事は駅の感丈では判らない。六時四十五分、汽車は孝義に到着した。丁度其時、中山服の支那人が、外国人を連れて入つて来た。言葉ですぐ独乙人と判つたが、憲兵の取調によつて、ソレハ「ラインコフ」

【34ページ】

といふ兵工廠の技師の様であつた。聞く所によると、この工廠では、毒ガス等の化学兵器を造つてゐるといふ。孝義のステーションより見ると、北側に大きな煙突——煙を吐いてゐる——と、明かかとした電耀が光り見える。

洛陽の手前の駅らしきに二三十分停車して、次に止つたのが洛陽駅である。駅に電灯無くアーク灯のみの様であつたが、駅には極く暗い電灯があつた。下車、出stationの時は憲兵巡查等あり、執照の提出をせまらる。名刺を出し、そのまま直ぐ、大金台旅館に行く。木下李太郎氏も嘗て宿まられた所。木下氏の章にある通り

(注：木下李太郎「徐州—洛陽」、「地下一尺集」東京：叢文閣、一九二一、一六四頁。いま『木下李太郎全集』第十卷、東京：岩波書店、一九八一所収、一三二頁。ほかに同全集第十卷所収「河南風物談」九八頁、および第十四卷所収「洛陽及び鞏縣」三九〇頁にも大金台についての記述あり)、実に酷く、案内さるままの部屋は寒く、眼も当てられず、止むを得ず二十七号といふ部屋(一元二毛)に四人止る事にした。蒲団は上下で二毛といふ。それで各々よいのを二枚、追加さす。値段を気にして却て持つて来ない。結局よいのが八枚更に揃はないのである。

【35ページ】

仕方無く悪いのを上に重ねて寝る。木炭の暖房である。午前八時前に起床。今日始めて煖炉の有難さを知る。午前九時半頃より、先づA氏が鄭州領事より頂いた督察專署の宋秘書長への紹介状を携へ、公署に赴く。先づ裏の部屋に待たされ、後、応接室に通さる。五十格好、士官学校の出身といふ。士官学校を出で、この年輩で第十区とかの秘書長では大した人物ではあるまい。用事は早く心得てゐて、劉先生といふ人が其部屋に表はれ、我を案内してゐて呉れる事になつた。十時頃より、洋車七台を連れ、巡查三人が自転車に乗り、劉先生ともう一人巡查が洋車にのり、龍門へと行く。

大金台旅館の横手を北へ行き、城壁側ひに右に折れ、更に北へ折れると城門に至る。城内の規模小さく、形も変で、

【36ページ】

到底、其昔の盛況等は想像する事も出来ない。場内に入れば道路狭隘にして、通行人も悉く綿服にて、婦人の華美なものを見ない事は開封と一様であるが、一般の生活程度は更に低くなる可く、今日此の町の民生の程度も思ひ知られる。間も無く、洋車は公署に着いた。

公署を出た洋車は軌を並べて、細くて悪い道路を、曲り曲り進

んで行く。今朝から食事もせざる事として、乗車前に買った落花生を喰ひつつ、道路を見るに、町の中心部なるらしく、相当賑かな通りを通る。商場、中州飯荘等の前を通る。よく眼に立つは、食物店の多い事にて、餅の様なものを多く売つてゐる。又城門を一つ越すと、竹細工屋が多く眼に立つ。極く大きい運送用の籠から、手提げの籠、玩具の籠等、中には欲しいと思ふものもあつた。其時前方に空砲の音等し、何事かと思ふ。巾帽子に鉢巻せる多数の中国兵が

【37ページ】

演習の最中であつた。最も奇抜なのは、模型タンクの滑稽で、芝居の大道具式に出来てゐて、中に人が居る事である。阪を越えると、川の堤になる。洛水は相当の広さの水の美しい、底の石の数も読まれる程の美しさで、相速い流れで流れてゐる。やがて来た渡船に人力車、自転車等と共に一行は対岸に渡された。川を渡れば其処は一面の砂地で、洋車の走行を助ける為め、又徒歩で少時歩く。上流の方にかの天津橋があるといふが、見当らない。やがて車の人となり一時間余、関帝廟に着いた。遠くより眺むれば、赤壁で大きい環状形になつて囲まれてゐるが、二間オキ位に破れ、其囲みの中に、森の黒い塊りとなつて見える。横から道を進み、廟の正面に出る。正面の両側に、大きい獅子あり、其の獅子面白い、背中に二匹の子獅子がはひ上つてゐる様な形になつてゐる。大門を過ぐれば、其処に大きい

【38ページ】

御殿があり、中心に関公がある。芝居に見る様な赤い顔で無く、普通の顔であつたので、意外の感じがした。何時のものか知らないが、清朝のものであらう。極めて他愛もないものである。其の御殿の向つて左側にあるのは、五虎將軍の塑像を祭りあり、関公を中心に、趙雲、張飛、黄忠（2字分空格）等あり。正殿の後へ案内さるまま、奥へ進めば、後の大きな御殿の間に、籠にの

つた文人の如きあり。矢張り関公の道行の姿ださうだ。一番奥には、又関羽の金粉面の像あり。この方が前殿のよりよい様に思はれた。これで終つたと思ふと、案内人はこの後方に関公の墳ありと。即ち進めば漢寿亭と横書の牌の後に饅頭あり。

関公廟を過ぎて一時間、車は特別に飲食店の多い所で停つた。向ふを眺むれば、河の■面がある。両方からの丘陵が其河で区

【39ページ】

切られてゐる。劉先生に聞けば向ふが龍門だといふ。其処で昼食する事にし、一椀づつの麵を取る。鶏蛋面だといふ。随分奇体な味とする取り所のない麵で、箸は竹を割つたままの相当物凄いいものであつた。N君は半椀をも口にするを得なかつた。自分は腹も減つてゐた事として、一椀を旨く平げた。一椀が十五錢だと聞き、同行の劉先生は驚くと共に相当憤慨してゐた。食後休息する暇も無く、河沿に、山の切れ目に向つて進んで行く。余りよくない道の途中に、工事中の所あり。相当歩き難かつた。「伊」河はすんで水美しく、丁度日本の宇治川の辺りを大「概」にしたものの如く、遙か河向ふに見える寺の内、手前に見える方は香山寺だといふ。向ふに見えるのは、名を知らぬと劉先生は云つた。此方の岸のやや高い所に山門がある。潛溪寺だといふ。其辺りより伊水の眺望は又

【40ページ】

格別で、遠く香山寺を遠景とし、伊水の流れを前景に美しい清流に一羽凝つと首も動かさず、鷺の様な鳥が立つてゐる。劉先生に何んといふ鳥かと聞くと、自分も知らないが、北平語の老等（北海によくゐる）で、魚が来るまで、何等までも待つてゐるのだと。寶陽洞の前だと記憶するが、一間の房子があり、其の前の景色も又格別によいものであつた。

では、ぼつぼつ龍門の石仏の感想記を書かう。三窟から成り立つてゐる。第一の洞は正面に巨大な座仏がある。右手を挙げ、左

手を膝に置いてゐるが、何んといふ仏か知らない。其の両側には、各二つの脇侍が立つてゐる。非常に注意を惹いたのは天井の飛天の群像であつた。琵琶や筆を持った姿が、甚だよい。そして其彩色も面白い。勿論元來あつたものか、後世につけたものか、

【41ページ】

何れにしても、濃い朱色がとても魅惑的であつた。

第二窟は寶陽洞である。是は北魏のもので、龍門石仏中の雄だといふ。此処の天井の図柄も第一洞のものと同じ図柄と思ふ。(以下9行空白)

【42〜44ページ】(12行すべて空白)

【45ページ】

【欄外】 観音堂 張茅八時一八 二十 交口八、三四 三六
 会興県八、五〇 五二 陝州九、一六 二四 大營九、四七
 靈宝十、十一 常家灣十、四六 閩郷県十一、〇八 二八 盤
 豆鎮一二、〇三 閩底鎮 一二、二六 潼関一二、五三一
 三、一四 華陰 華州一四、三七 渭南一五、三五 四二 臨
 潼一六、四〇
 三月六日
 二時半に起され(以下4行空白)

夜の明くるを待ち、窓外の景色を眺むれば、地形急にして、一面黄土の山にして、地勢極めて急にして、而も各所に点的に洞あり。八時十八頃、観音堂に着く。急坂を滑る事馬よりも走く、五十分頃になつて、南側に水の無い河が見ゆる。最も奇怪に感ずるは、あちこちにある、黄土の太い木の様になつたもので、中には人家の角にあるものもある。又人家に離れた所にあるものもある。

【46ページ】

交口はホンの田舎の小駅であるらしい。人の乗降する様子も無い。駅の構内には牛引きが数頭を可愛いといはんばかりに、大切にいつくしんでゐる。此んな牛を河南山東と運んで人手に渡す感

じは、どんなであらう。枕木を修理してゐる。赤壁の田舎家の里居の前の壁に尽忠報国、勿忘国恥と書いてゐる。此んな所にまで宣伝の手が届いてゐる。国民の排日感情を取り除くのは簡単な仕事ではあるまい。交口を過ぎた高地からは、先刻の河が相当の距離に相変らず、底を表はしてゐる。此辺になつてきて珍しいのは、黄土が永年の浸蝕によつて、丁度地図の模型の様に一段と低くなつてゐる。其の一段の広い狭いによつてスロープの緩急がある。赤土の柱には其の先に塔の様な形の【図】がついてゐる。恐らく仏教関係のものであらう。

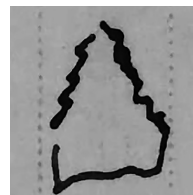
【47ページ】

会興県は相当大きな停車場で控線等あり。駅の近所は今迄と異り地形が平面的になり、特に南方へは極く緩いカーブの平原を成し、先程の河に連つてゐる。一寸気付いたのだが、此辺一帯の人は眼がはればつたく細い。勿論一かは眼(注…一重まぶた)の様である。顔は皆浅黒い。昨日から可成り曇つてゐたが、朝になつて愈々曇つて来た。次の駅につく間に一小駅についていたが、標示がなかつたので判らなかつた。

陝州は想像以上に大きい駅。実弾を籠めた憲兵が二人の赤匪を嚴重に結へて駅へ降した。駅には物売りもあり、女の姿も見える。恐らく姑娘の類と見受けた。出口の所には沢山の人が立つて、只ポーツと駅の中の賑ひを見てゐる。陝州の町は、壁を隔てて判然何へないが、多くの人家の家屋根の窺う所から想像すれば、立派な町なのであらう。駅の北側には大きな近代工場も見え、黒煙を揚げてゐる。

【48ページ】

河南省には黒い建築用の煉瓦が沢山ある様だが、特に此の辺は多い様である。所々未だ焼てないそれが美しく積まれてゐる。此辺になると車中から黄河が見える。鄭州辺りと違ふのか、思つたよ



り狭い。七八町の中しかない様である。水も多くない。陝州を過ぎた辺りから、黄河の恵みを受けてゐる精か畑の麦は青々としてゐる。沿線の両側はよく開墾された畑である。

大營は小駅、陝州の附近程ではないが、相当に畑は耕されてゐる。南北は北向きへ山脈になり、其北側の山の方が恐らく黄河であらう。何れも可成りの距離である。眺望は極めて平凡で、何の趣もない。

靈宝は今迄にない立派な駅。駅の北側には恐らく黄河であらうが、見え、数百米南方には城壁が見える。駅と城壁の間の手前に、大きな近代工場が

【49ページ】

ある。城壁に見ゆる城門は、嘗て撫順あたりで見たと同じ様な黒の「砦式」のものである。禹王廟とある大きな楼が見え、其壁には擁護蔣委員長の「宣伝」語がある。城の向ふ側の山の上には、塔の様な極く背の高いものが見ゆる。駅を出て少時、川を越ゆる所に、天下の險、函谷関がある筈である。三層の城門の如きあり、上に横書きに函関とあり。汽車は右に広々とした黄河を見、左に黄土を絶壁に切り落した山壁である。今はぢめて眼の当り黄河を見る。折柄の曇り日に対岸も見えず、水の無き瀬は砂漠の如く、水のある所は大海の如く、此の決壊する時の被害の甚大なる事は、眼前に此河を見て始めて知らる。南側の山々は全く不毛の地らしく、稀に見ゆる一、二本の木も、枯れ切つてゐる。其んな所にも所々村落がある。一体彼等は何によつて生活してゐるのであらう。其頃より、高地を上りつつあるらしく、

【50ページ】

スピードが落ちて来た。南側に大きな山脈の見ゆる、より此方は小さな畑地をなし、其の平原と山脈との間に峡谷がある様である。北側の黄河も、もう平野の向ふに見えなくなつた。

暫く眠つて眼が醒むると、閩郷県である。此駅屹立せる黄土の

山の下にあり、北側に遙かに黄河が見える。が一向に町らしきものは見えない。駅に祖母、母、娘と三代の人らしき者が、皆日本式にホー被りして立つてゐる。祖母と母とは上下黒であるが、娘は真赤の上衣にすみれ色の褲子、水色の靴下、靴で立つてゐる。安物の白粉と、化粧が下手の為め、顔が拙く見えるが、瓜実の可愛い顔をしてゐる。年の頃十五六でもあらう。テクテクと子供の様に行くのが迎も可愛い。

閩郷を過ぎても別に景色に何の変化もない。今度は両方

【51ページ】

共に黄土の山々である。

潼関に近づけば黄河が近づくに見え、北平の箭楼の如き大規模のもの見え、又城門らしきものも今迄も未だ見ざる大規模のものにて、この城市の人家も瓦葺の堂々たるものにて、この人家の稠密より見て、此の町の陝西への重要地点なるを想像するを得る。駅の南側を見るに、かの瀧沢さん（注・瀧澤俊亮）の画にあつた穴居の図が見える。この穴は、今まで見た様な整つた立派な門もあり、土塀もあるといふもので無くて、極めて貧弱である。又駅の極く近くに見ゆる家の二階の障子は元禄形の碁盤に紙を貼つてあるのも日本を見る様である。洞の前には、あちこち人が立つてぼんやり列車を眺めてゐる。駅の出入り口には群衆が相変らずぼんやり眺めてゐる。

華陰車站につけば、眼前に華山が見える。沿線には其辺に水田

【52ページ】

があり、小川の流る等、聖山の前景をなしてゐる。其辺に小さい城があり、又南側の沿線に、石神石馬の類が下半身を土中に埋めて立つてゐる。華山よりずつと沿線には南方に巍峨たる山脈が続き、折柄の曇り空に薄墨の様に見える。北方には樺マツの木が白い皮をつけ、垂直に叙しげに立つてゐる。木々の間には、整然たる畑が続き、それが無限に北の方へのびてゐる。牛車は日本の大八

車位の大きさの輪のが眼に立つ。そうした牛車は二匹の牛に薄緑になつた畑の間を縫つてゐる。黄河の豊富な恵みを受けた畑は、広々とし、際限が見えない程にのびてゐる。畑を耕す牛は人の乗つた鋤を引いてゐる様も、日本に見られるのと同じである。多少其の中は広いが、広い野中に草を獵る牛、平籠を持つて人蔭の全く無い野中に、懐しげな顔でながめる子供、辺狭の地にも春の来た事を思はせる。

【53ページ】

華州とあるが、何れが華山か想像も附かない。何れを見ても華山と思はれる底の山々が連々と続いてゐる。駅は高台にあつて、(欠) (一行空白)

臨潼に至る。南方遥かに驪山を望む。堂々たる煉瓦造りの支那式の房屋にて、駅に詰むる隊は、丁度日本式と同じ飛白の褲子を穿き、畑を耕す農夫の耕具も今日日本で使用しつゝあるのと全く同じで、河南省にて使用中の中広きものと全く同一でない。南面の方の山が驪山で、今日は何の危険も無いと、帰路是非行きたいと思ふ。

灊橋^マ?は鉄路の南側に見ゆ。橋台平直にして、橋梁の壘頗る

【54ページ】

太し。其長約三丁位、石造かと思ゆ。一端に破れたる牌楼あり。五時五十五分汽車は西安に着く。其前より沿線にして城壁あり。其の雄大なる事、北京城と相並ぶ可く、隋唐の世に築かれたりといへば、或ひは弘法大師も遠く黄土平野の中に、この城壁を眺め、其の文化の雄偉に尊敬の念を惜まなかつたであらう。

下車すれば既に公安局あり。旅行者の案内人あれば荷物托し、迎への自動車にのる。女学生の風の婦人もトランクを底から調べられてゐた。我々の自動車も巡査によつて止められ、執照の提出を要求さる。執照を出すと、それを自動車のエンジン胴の上で一枚一枚、要項を写してゐる。十数分の後、自動車は放たれ、宏壯

な旅行社の門をくぐる。玄関についた時には、一番先にこの費用の大ならんに度肝を抜かる。我々は一一三

【55ページ】

号に入る。バス便所共に一室の中にあり。其の堂々たるに驚く。夜は易俗社に行く筈なりしも、次の日の疲労を慮り、中止にする。飯庁に行けば、一半は仕切られて宴会場となつてゐる。聞けば楊虎城夫人の請宴といふ。定食を喰ひ、一風呂あびて十二時頃就寝。三月七日

午前オートミルの朝食を終へ、十時半頃より自動車を備ひ、城外へ出る。西関より出るのである。城内の道路広く、両側の家々の様子より見て、元来かくあつたものであらう。家々は多く青ベロに塗られ、二階のまどは紙ばかりにて、日本の長屋風と同様である。途中、鐘楼鼓楼を眺め、西関を出る。暫くして、更に外城の門あり。出でた側には広大なる飛行場あり。欧亜航空会社白塗りの雄姿を見せてゐる。其他小さい二三の飛行機もあつた。軍用機であらう。徐州から

【56ページ】

の隴海線の途中、銅山県で装甲自動車を見たのを始めとして、数回に渡つて軍隊の移動を見た。それと同じ様に、西安に於ても咸陽への途中、全武装した軍隊の移動を何回となく見た。面白いのは、背中に洗面器をつけたのや、雨傘をつけたのやがあつたり、一隊の後方にも兵站であらう、米や麵粉の外、鉄鍋等々、天秤で前後に担たのがある。【眉注】練兵場に接続した広地には、カーキ色の小天幕】城外へ出ても同様、一面の立派な道路で、三橋鎮を過ぎて、渭河に着く。左手に咸陽が見える。河には目下仮橋あり。仮橋の上手に橋を建設中である。其の橋では、乗客と自動車は別々に渡らねばならなかつた。一間余りの仮橋の上を、馬の車や種々の車が輻輳して、戦場の様である。其んな橋に壘を盛る様な仕事も兵士がやつてゐる。城外関なしの道路の近くで「咸な」鉄路の

修理等も兵隊がやつてゐた。渭水を渡り、自動車はスピードを増して、途中沢山

【57ページ】

の古墳墓を左右に見ながら、周の康王の墓を過ぎ、間もなく右に折れ、正面にセメン塗り新式の周文武陵と赤地に白で横書きにした門の前に降り、徒歩で中へ進む。小学校になつてゐて、礼堂とある教室では頭をオカツパにした男の子が二十人程ゐて、休憩中の様であつた。其の正面には赤ヌリの木主三個があり、中心は周文王、右が武王、左が周公とあつた。其の裏には小山があり、前周文王——の石があり、其の小山を越えようと、武王のそれがある。相前後して並んでゐる訳である。文王の墳墓の上より下を眺むれば、武王の墓の前の石碑の前の左右に八個の明清代の碑が煉瓦で囲まれてゐた。何んといつても三千年四千年の古蹟である為、全く其の香を失つてゐる。例へば、其の建物にしても古くも明代、大概は清代の修理であつて、別に何の意味も無い。唯、全体が墓地といつてもよい。其地方の緩やかな平原に青い芽が一面に生えた辺りを眺める時、何人も想を憶昔に回へさない人があらうか。文王の徳を称へ、紂王

【58ページ】

を悪んだ民が、今にも其辺から出て来そうに思はれる。一面には人の子一人居らず、稀に思ひがけない所に、男の子が籠提げて、草等をとつてゐる。彼等の生活には、政治の善悪等問題ではあるまい。現在の政治に何の興味、といふより、関心の無い彼等、数千年の昔でも大体同じ様に社会生活に無関心なのではあるまいか。そんな事を考へてゐる中に、自動車は右側に大きな墓——案内の督察は漢の將軍の墓といふ【眉注・成王】——を眺め乍ら、自動車は悪道物を凄音を立て乍ら走つてゐる。新しい道路なのかどうか、上が軟いらしく、スピードが出ない。部落のある所を通ると、犬が猛烈な勢で自動車に向つて走る。何度あつと云つたか知

れない。自動車が珍しいのであらう。突進して来る犬は、必ず自動車と競争する。そして自動車の前へ来たがる。俄にハットする。時には小豚までが同じ様に不恰好に追ひかけて来る。

【59ページ】

間も無く遠くに小山といふより築山といふ風なものが見える。其の内に止つた。矢張り学校になつてゐる。学校の学生らしき物珍しげに我々を眺めてゐる。其の築山の様なのは、色々の石を巧みにとはいへない不細工に配置してあつて、其の山の上に男女の塑像がある。護衛に来てくれた巡査は知らないと言ふ。其の築山のあちこちに、石獸の類の非常に素樸なのがあちこちにあつて霍公墓と説明がついてゐた。山を下りると、其処に霍去病の墓と知る可く、墓石があつた。矢張り清代の人が書いた墓碑である。其の向つて左手にも石獸があつた。即ち我々は霍公墓の裏側より入つた訳であつた。門を出ると、左の方に衛青の墓があると印してある。更に自動車にのつて進む事数丁、右手に大きな墓が見え、其の前に新しい控へ屋があつた。墓の正面には二列に戴天仇（注：戴季陶、号は天仇）や于右任等の政府要人の手植の柏があり、正面に漢孝武帝墓？と石墓がある。隸書で立派に印されてゐる。これは此の

【60ページ】

間来、新聞に出てゐた何千年祭かをした時の建物であらう。墓の遙か右手には今見て来たばかりの霍去病、衛青の墓が小さく二つ見えてゐる。一面青い若草が生え、遠く武帝の偉業を偲ぶにふさはしい。自動車は一直に南進し、大道を東に進み、十数分余にして、馬跑泉に至る。道路を距てて斜めに巾の井戸の大きい様なる泉あり。北側は既に枯れ、泥沼の如し。南側のもは清い水湧き、数人の婦人が洗濯等してゐた。泉に向つて右側には、上半部の欠けた唐太宗云々の碑石あり。明の建設である。自動車は更に阿房宮に進む。咸陽城外を迂回して、元の如く、歩渡かちたたりに出る。例によ

つて、我々は自動車より先に、橋を渡る。橋を渡つて暫らくして、驢馬の鳴声。倅さて而は自動車にひかれてもしたかと思へば、一人の四五十才の男が河へはまつて橋桁をつかまへ、しきりに叫んでゐた。物見高い支那人の事とて、またたく間に一杯の人ばかりとなり、棒切れを持つて救助に行くもの、「遣方」無く

【61ページ】

眺めてゐる者等、支那式の暢びやかな一騒ぎあつて、自動車は阿房宮に向ふ。約三十分余にして阿房宮とて自動車は停つた。辺りには何物も無く、青草の一面に生え、緩やかな平原は際しもなく続いてゐる。あちこちに黄い土で覆つた井戸が見える。眼前には秦の遺物だといふ石像が上半部を折られて太短い短大な姿を示してゐる。こんな様子では、昔への雄大さを偲ぶよすがもない。あちこちにとつともない大きな礎石が無数にあり、此処から此処までが阿房宮の物だと説明して呉れると思つてゐたのは大きな間違ひであつた。どうも我々は日本式に考へていけない。秦といへば三千年も昔の時代である。何も無いのが当然なのである。行く時に宿のボーイが黄土而已と繰り返へし行くなといつたのも無理はない。我々は余りにも取り留めの無い風景に佇然として、更に黄塵を蒙つて真白になつた自動車に乗り込まねばならなかつた。約四十分、自動車は

【62ページ】

宿の門に着いた。全身鼻の穴から足の先きまで全身真黄になつた。早速一風呂あびて、次の日に備ねばならない。

浴後一行は疲れたと云て、外出しない。自分は豫て聞いてゐた易俗社を見ん為め、八時前宿を出た。附添ひの巡警が全部世話をして呉れる。易俗社の花牌楼の前に、切符売り場がある。前排が四十銭である。門をくぐると真黒で人の影も見えない。少し進むと、胡弓の高い音と、椰子の音が聞えて来た。驚いた。野天で演じてゐるからである。様子は大体北平の下等劇場と同様なので、

天井はアンペラ様のものを張り、満員で一番前の極く悪い場所しかない。上手の方であるので、太い柱に邪魔されて、見え難い。茶を持つて来る、北平の通りである。舞台の正面中心には、今晚中班、淝水之戦と書いてある。現在演つてゐるのが其れかどうかも分らない。舞台では大花臉であらう、大きなそれこそ北平で見られない大型の刀を面白くあつかつて、

【63ページ】

芝居をしてゐる。兎に角、通し狂言であつて途中から見た為め、其のストーリーが完全に分らない。小生も老生も出る。青衣も出た。王天民である。迎も美しい。白の甘さ、細い眼の魅力、小生の王仲易との濡れ場で不信々といふ所等、十分の色気であつた。遠目ではつきりとは判らないが、三十才は越してゐるのだらう。大形のフクラミある舞台顔で、人気のあるのも無理はない。武浄の立廻り振、形を変に動かす所、白の具合、等々に、何処か素の様な、昔ながらの様がある。老旦も肩を動して——普通の老旦も、少しは動かさうが、こんなにひどくはない。山西椰子、直隸椰子にもこんな所はあらうか。二人の小花臉の出る芝居があつたが、芝居は旨く、面白く見られた。こんな立派な芝居を持つてゐる、当地の文化の古い根底を持つてゐるものである事を想像出来る。一体西皮調が、秦腔から来たといふ青木先生（注：青木正児）の説は決して根拠のないものではない。現在の西皮の中に、其の腔調の一端を聞き取る事が出来る。楽器は、二丁の

【64ページ】

胡弓と椰子、其他は現在の皮黄と大差はない。上手に胡弓二丁がゐて、他は皆下手に居る。元来易俗社には自分の舞台があるのださうだが、目下修理中だといふ。現在やつてゐる劇場は野外劇場である為であらうか、舞台が迎も高く、カブリにゐれば、舞台の役者の上半身だけしか見えない。西安一といふ丈であつて、役者の技藝も立派なものであり、衣裳も上海製の立派なものであつた。

行頭、小道具等、皮黄と忽んど異なる所はない。唯々衙内の机の上の道具が多少とも異なるものであるが、形が變つてゐる丈である。今日の秦腔は決して元來の夫ではないであらうが、其の大半の趣は備へてゐるのであらう。我們は最初に夫を聞いた時に、全然耳訓れないものに少しも思はなかつた。芝居の動作立廻り等、全く皮黄等と同じで山西梆子や直隸梆子の皮黄と異なる程の大差はない。其昔、魏長生が秦腔を招来したといふのも、今日の様

【65ページ】(以下空白)

付記

翻字の発表、および図版の掲載にあたり、九州大学附属図書館より格別のご配慮を賜った。記して感謝申し上げます。

本研究はJSPS科研費21K00328の助成を受けたものです。

「曲阜徐州開封洛陽西安旅行記」『言語文化論究』第二十五号、二〇一〇年) 正誤表

- 19頁上段19行 (誤) 閔郷県 (正) 閔郷県
- 19頁下段12行 (誤) 華陽駅 (正) 華陰駅

図1 曲阜孔廟でのメモ (配置図)

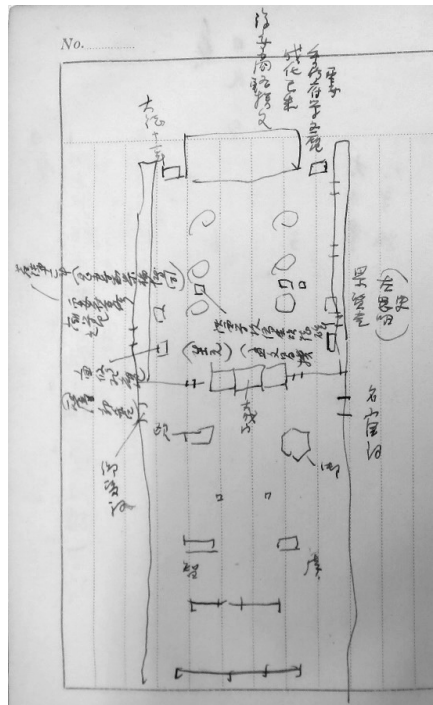
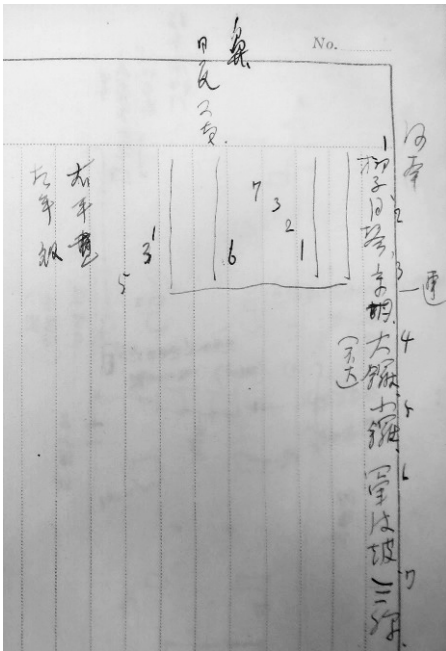


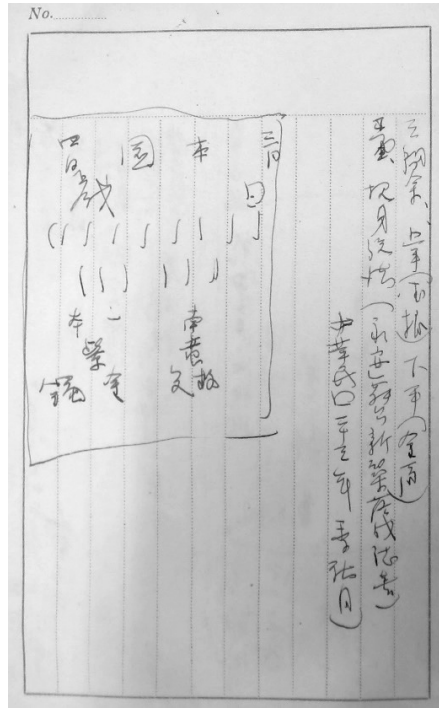
図2 1936年3月 開封永安舞台でのメモ (楽器の配置)



- 1 梆子、2 月琴、3 京胡、4 大鑼 (不大)、5 小鑼、6 单皮鼓、7 三線



圖4 1936年3月4日 開封永安舞台 戲票(浜文庫/集181/12)



「本園 三月四日 日戲 南蠻救父 一本紫金鐺」
 三■上手(玉振) 下手(金声)
 正面 現身說法
 (永安舞台新築落成誌「書」 中華民國二十五年季張月)

圖3 1936年3月4日 開封永安舞台でのメモ

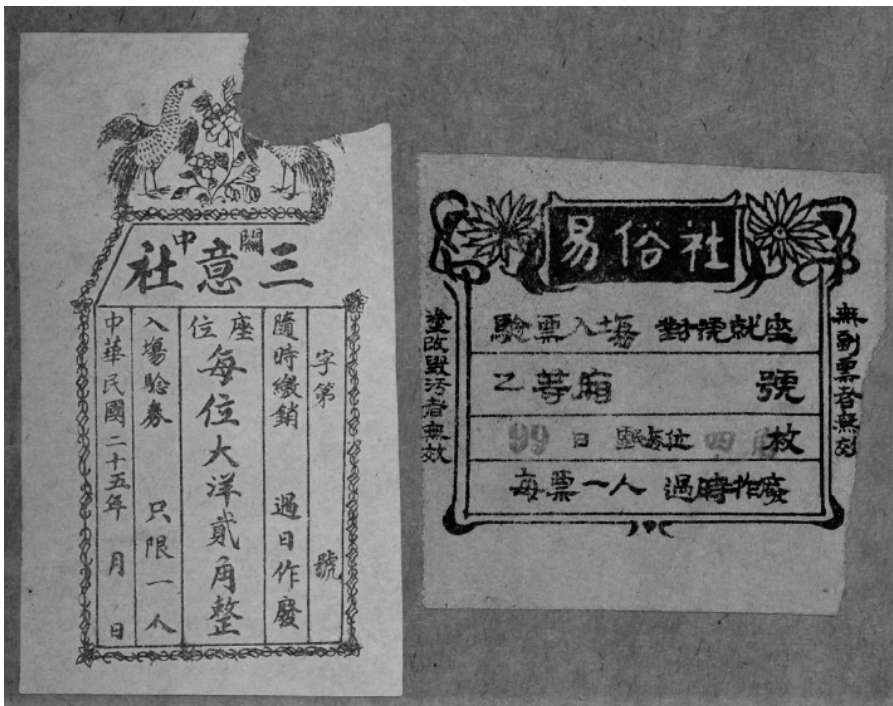


圖5 (左) 1936年3月7日 西安 易俗社 戲票(浜文庫/集181/14)
 (右) 1936年3月7日 西安 關中三意社 戲票(浜文庫/集181/14)